



特 18
1833
65



繪本左圖記六篇卷之八目録

加茂清正源入小道詰

日國

清正威を示し御民を安んずる事とす

加茂清正海江倉橋禱克滅詰

清正禱克滅と我々國

並河合右衛門禱克滅と捕人國

加茂清正橋兩を及詰

日國

清正朝鮮の両を及を安んずる事とす

繪本左圖記六篇卷之八目録

加茂清正討元良哈話

日國

清正石瓜洲にて元良哈の城を圍む

其田孫を清元良哈とて戦記の國

清正海州より富士に於る國

小西外長渡津津話

申諾に渡つて小西と此國

外長申諾を軍と無令少國

小西外長入大明話

小西外長書と朝鮮の城に送る國

繪本古圖記六篇卷之八

加茂清正入小道

加茂清正討元良哈話
加茂清正は馬を鞭打つて城を立く終に王城の南門より
入り門と開きて入んとはけし門内より日本乃兵士立出て中
中より小西外長守外長きのふ城に差入ると我者も合しに方
の門と護し心加茂清正の御勢と見受はれ小先三に入門より入りて
至人外長と對面あり門と開くが外長我々も知らずは速通し
なりしをくは内河に乃御勢とて見受く通し中はしとて
城と門を閉りたる清正と見受けしなり又小西外長とせし
ころこそ其孫今の王城に入ては治しとて城外に陣を立り
其傍乃百姓と云きゆの中とては小大王及びは



加茂
源氏
入る
道



東照宮
八幡大神宮
天照大神宮
春日大明神

真蹟記六篇卷五



此より日に日と東に西方へ落給ひ昨日日本勢乱入
 又一人も跡を著る者これに中は清正守て叔小西やが居城へ一歩のり
 多柄頼とるこそ仕合せよ男よはしく我の急よ大王面をるの
 追ひ搦とばして功と多長うとよ拙でんと諸軍よ中知して兵糧と
 つい瑞志摩の日に中合せた子の勢と引て飛ぶとく又追より中を
 爰よ日本乃言に逐じ出た人々物語るふ日本人をて「角」て
 うんどんたる身よ嘲とる者有り朝鮮人渠と号て倭學通り
 威廷虎威廷虎は名也と唱おせりけ威廷虎清正に捕へら終て軍中乃
 通事となせり清正名と改めて後友治郎とゆりけ後友治郎中
 中より大王の西の方平安道ハルハルの西へ進より別とく威廷
 道の内へ進らとるは此の事よりくるは撰人

乞とて西の方には錦津川乃大河ははし我先
 目を費し王城とまに後さより中の方城道ハルハルと進て西を
 と生捕る」とて日夜を急ぎ十三日乃夕後と經て安邊府安邊府
 とくふにたぬけけ時又月十又日之猶又瑞志摩尚平の清正ハルハルの勢
 とて清く遠境又入遣らめんゆと恐まき日夜と日と終てるよ
 め漸け安邊府安邊府を清正に遣付先より兩お兵を合せと進らゆ
 日月十九日永真府永真府とてふにたぬけけ小朝鮮人これをも
 錦海錦海の順和上順和上西をまける我用き終て忠義乃志ありやま
 人教と集り来り守護なるべき旨と書記國臣金を
 ぞ書より清正とてんく大よたぬけけ日本乃弓矢并八幡を
 乃御示しかりとてた人鬼が虎狼の穴と進給る



威を
 示して
 御民を
 安んず
 事内と
 図



と先多に知して進まると備志磨尚重澄の沖谷の要國の
 若の極めて添舟のちまうけりれとひて味方兵と歩切石打
 入斗り討んと巧らん後より進も道ちを多あひそ幕めぬ
 法正曾て身にけり朝鮮の驍兵をもいづる斗略と揃りて
 何れどのゆひりん某先とんるゆ小兜乃正に足下を思ひたま
 けり陣と圍め某が善伝と待り候て吾左右中一正しとてそ
 諸軍と引合し驅りて尚重今の冷方るくは候くは法正
 かふりまひやと独り法して先其地を營とつて孫道きまうり乃
 郡縣威真府在瑞川名ふりてふん我妻居し法正が便宜のそと待
 けり

加茂法正倉橋韓克滅

加茂法正は備志磨尚重と永真府在にてお別れ軍馬と
 少兵向けて進もろちるよ王城より右連し後法正即ち通る
 都近き國こそ幕用ははつりて法正は後法正即ち通る
 見り知れぬ去地乃はしや法正よりちるよと幕用若やめと揃り
 求りふ潮百姓二人と引連れまう法正進く振きて山石の幕用と
 よとやきしるふ彼百姓も雲く群して進まんと法正は
 又怒り汝等幕用を我河を背やと一人の百姓と一宴を敷し
 うり今一人の女民と法正と合し震いさるき命とちりて幕用は
 進もろ先より又日と果て法正は乃山にきて海打倉在りて
 逸りあうけり朝鮮海上運送の米穀を納め安堵れり本
 倉多く建陣山の懸死之法正は之を惜し人馬の真意を休め



加長清心
釋克減
我子圖

真顯言六存卷五

うる所に朝鮮のるの太お韓克滅をふく者教十の軍兵と引
 一加後が勢と八方より進出と矢と射るる雨よりと於禁く面を
 向へるがやうに「法正急よ中」して彼を急より多く懐と引
 却に方々積で捕と如「敵の矢先と防ぎら朝鮮人け棒を見
 て八面より進くと進より矢と射ら圍成作り於て積に「依よと
 矢陰んと矢加後が勢の益て」としうるれば彼依の遠回より三百余
 挺の銃炮と仕つけ敵の矢以て進付」と見とほして二日よど門と
 射殺せば其着山岳に御多き海産の糧と五百の雷の一皮も落
 らくくして表と華び朝鮮人矢五二つ又七人々射倒と化忽死人
 二百余人命を夢の若教と知し法正中知してとりやうれと
 捕とて何も加後信を勝井と大九郎本村と新飯田南島勝原等

後妻其回縁を信其外も畜の勇士どももわしうるも働まざら
 後地の御多きと「膽い冷」取殺て戦んとする若わくさんぐみ
 めとらも瓜にして進よりうけ討目くれる圍りたるを案角知
 らぬるるればと追捨あり四の陣をに海りたる抱る小朝鮮
 人いこの衆も軍勢と引とげ夜明けは再び戦と惜し今日乃
 至念ととらひ「法正」と屯と固め後後用心堅固と守りたる法正
 け棒ととら味方の勇士多ふ中合らら此幕より次ありし
 禁のがりに方々樹木の蔭をの回と埋伏し疾りぬると「ちん
 うり朝鮮の太お韓克滅人日本勢より計略ありとい愛ふ
 ちん伏今も海邊末念の傍と陣せりと陣に「てみるる後
 のめ方朝勢海と取殺し恐天のるもとんさうるれば例の勇士加後



並河合名門
賴克滅と
摘
目

真言六ヶ所巻五

信長清井上飯田石井並河津越本村森本其田飯後等軍卒と
引陣し敵陣より進出ぬお國の名を流しと唱とや吾や左右前後
の伏兵二附より入り用なきに朝鮮勢と切まふりく安ん進つり
彼を退きさせ置敷と切がどくいし難よるれ也れ哉の石井の上
より進み谷底退落され幸けしてふにわりたり若し河田の中
より勝む伏兵傷の若澤と等入らうり伏兵お韓克滅人し命うりく
進のびく境城を破るにとして後方と並河津石井門進うけ生捕りぬ
ぞとてうりたり

加茂清正搦面をなす

安ん朝鮮の面をなす信海の名を和上西人の始り石井道八の海郎
が日本勢より進出たりし安んれい少るれにたり會亭府地を破る

のび安んまがくく道昌ありたりけ會亭府地朝鮮良乃後進して
都より既入るとの来る土地なり國乃大石と鞠系仁人とやたりり
統下の兵士と集めてやたりり今日本乃大勇の鬼の軍清正と云
若し海若し和上西人の面をなす進てくるに安ん入はし我といふ小
防と我といふも彼鬼の軍といふてう敵討殺と云き速く面をなすは
捕清正の海若しといふゆゑも中乃軍卒皆をとせよ同じ面をな
をりり後へる道昌と云はれりりしけ後をせ清正乃陣中へ海若し
のゆかり清正と云はれりり後進後即と陣中へ海若しをなす
細を見らるる小西をなす其餘の官人悉く擲りおんがたるるを
惣貴場りりいを他人のな後しやあ安ん清正自ら教十人乃勢小
と陣中へ清正と云はれりり且け陣中獲て王と始り上下乃

加々夏 信正 朝解乃 両吉子 生捕 園



夏加々信正朝解乃

官人食終らう又く餉の支度ありて進ぶ給ふは「このころに法
 正とく令儀」に海乃肉味を集り御食膳の用意とあり又儀と
 て法正小勢とて只今料理持来致と云きり両さまと法正と云
 内し本村又花飯回角を満りんと其外は中勇士等も膳部をおせ
 或は鏡子又ハ盃種より肴肴と人毎に一酌くおせ中へハ給小
 寇も級も多し勇兵又十余人を入りたる法正燈のよと御織と法
 朝鮮の両さまと云る不索と云て終り兩眼涙よりと云る法正
 自らを索と解と官女及び侍臣乃其意悉く「はしむと解」めとて
 食と進み酒と飲し「心定」めいしくさまと始り近居少し「心解」
 て候く飲食は法正鞠系仁人及一城の兵卒又忠臣の養育と
 浪抄と云る日本奏し「事」を忠告乃法正は「はしむと解」めとて

命し両さまと法正と云る「興」に法正は安達乃方へゆくと法正は
 附流ひ来り世に官女侍臣等もいれぬ日本人の如し興と
 とうり夢とわけといふ小うとせ給ふ所なりと伏せ給ひ候は
 を難兵どもあうしく「嘆」罵り「よと云て引」たる不願と何中と
 思れ物と云け覆面して顔と包り兵どもおまひ彼覆面と云る人
 と法正は遠く是と見ると大に制し其面と云るもの「後」恥し
 りるものありしに心乃候は「所」に是と見ると法正は鏡の
 ように仁義を懐く情を大なると感せぬ希なりと云る

加茂法正討元良哈

朝鮮の國境より山に隣する國と元良哈と云る國の衆と會
 寧府名より日本軍入朝鮮のさまと捕へ給ひて震へ候は

加茂唐正
朝鮮乃
西方之
安達へ
透る
國



加茂唐正

加茂唐正

朝鮮の隣國方より唇服とて齒冷し捨棄るは我國より押奉るに
 いふ進んで日本勢と封じしとて数万騎の軍兵を備へ境迫り押
 寄せり信じて悪き事どもり勢迫る其後方より遂押し
 折崩せしとて西をなと敵を守護せし咸興府の鎭志摩尚重が
 陣へ送りしを牙の會寧府の陣に鞠系仁人が勢を又百金騎を
 率えし皆神印の南を妙法蓮華經と書て付とせ熱軍法にいつ
 派し元良哈名へと後向ひ勢相繼ぎ又星一り斗り元良哈名の
 軍兵に勢あひ鉄炮と放ち矢と射りけりいふ我に日本乃
 自勇いふやまども乃及ぶるは終に討まけ三里計に軍兵を
 一の城へ籠りたる信正城の押寄せり進めし城の勢と
 何れも墨をく置けり後信正城の城を朝鮮の城部よりい

遙勝つて望園なり信正城にして城の三方を包圍し遂率を
 とどり其後のとてしを又六千人とて勅也難きと石と
 人馬を以て握守りし城の工より城中へ射して聲し何れい
 びきたまりべきのけ並ぶる搦大門徹壁を碎け人馬死に
 若敷を知り城の中鼎の漏りくよをり人と周りに城戸を閉
 きし進出り城を陥れたる日本人名を流とつるがけてうら
 ひるいふに信正城に七烈八裁と切まると討り若麻と死せり
 とて城を捨てに方より進出せり是より信正城の破竹の勢い
 して不れ城を陥るる元十三を其の中より強く支し城の
 く落し難く見へるは信正乃勇長本林を以て其向強き流
 城戸深し進め難しと民討し城中より大の男二人きびしく



加茂藩
元良哈を
攻る圖

真蹟前六編卷五

十四



真跡記六篇卷五



信正大石と
元良哈乃
殿を深見
國

真跡記六篇卷五

十五

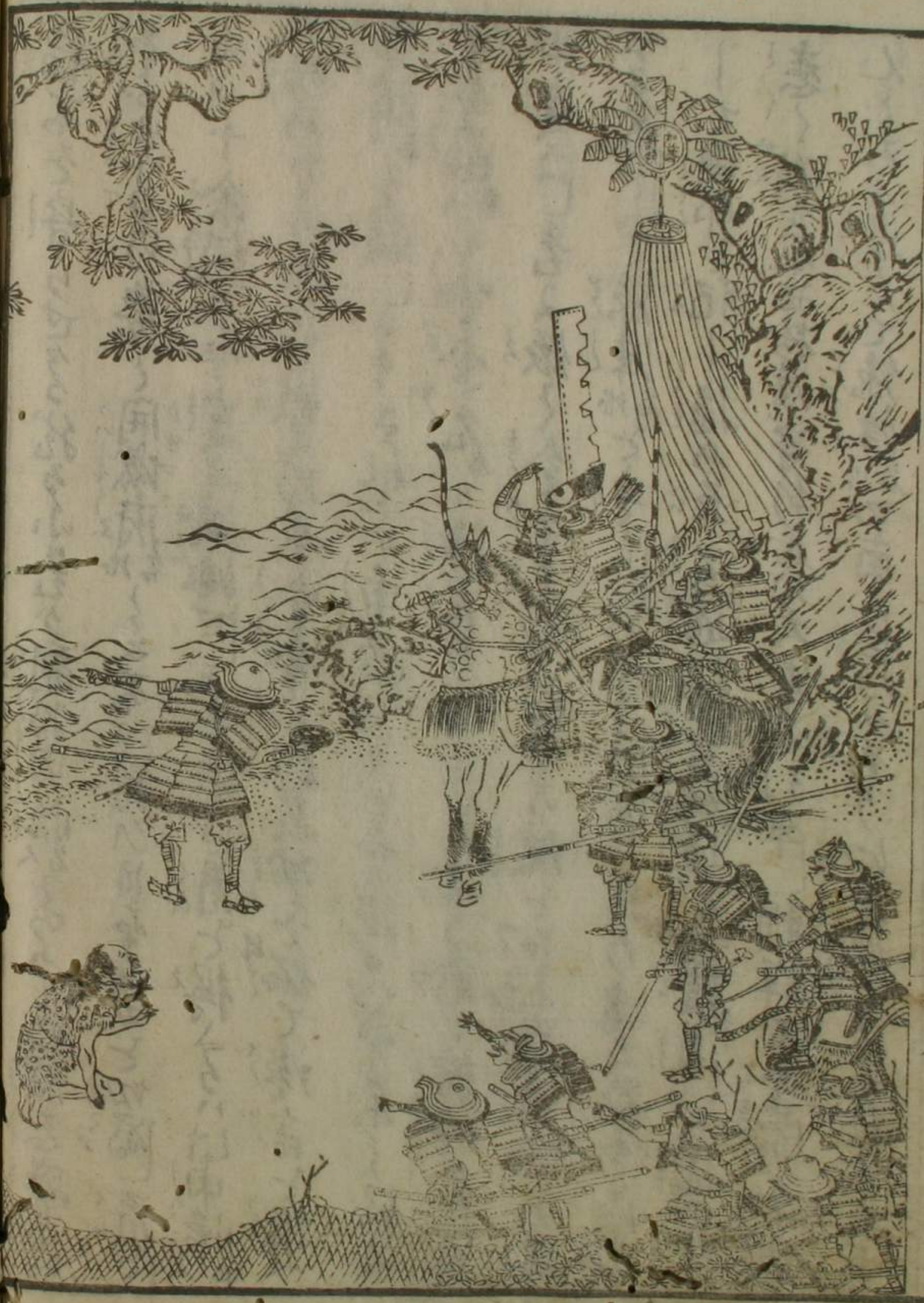
遷りて御出たりてまを飛く向く一人は紐合より孫玄清の今一
 人の敵に似ひぬの經三六余りの身の槍と引續り兵一案と討てり元
 良哈地の大男希りた勇士と日々其長八又由こりて眼丸
 く照りて中と虎撃針を挿りて九右に別と為神と擡
 どりた夢を切り押りくと叫びぬとて我ひい鬼神のぶく冷
 く書回孫玄清双うた槍柳の遠人るんが太文の槍爪をたね
 へ飛射りたぶり虚とんで實は美の中は康をとりて討斗り
 我ひが孫玄清一足踏進と見へが彼大男の綿番と槍先ぬく窓
 援より何うい志はしりたまるべき仰向は例とま持又叔と孫玄清
 と投付て死よりるるをそり運のぬちの哀と投する叔孫玄清
 丸の肩ぶさりと立て痛むるんが例とま持又叔と孫玄清

森本をちま款を彼らせ首とみくまころ清心少軍兵とみま
 入と吹りて終に城を奪はぬとれども惜むと不取の勇ま妻
 田孫玄清の家うそ命と海しりけ耐元良哈地の家民清心の面
 忍と敵て敗をとし知り若は清心今月の遠地は軍兵と
 とむと謂はしと朝鮮の安遠府名として引えたる途は海
 別名と云ふ乃海邊は洲りるるが漢まの家居と日々昆布荒布
 むと屋上に布りて雨露と湯ぐり汲けとぬしりて荒をぞび
 ころ住居數十軒あり清心を木の漁人とた安遠府名との奥
 やみと後後海即とて釣るる小彼漁人思うく遠くくるの
 妻赤尾細やう小物活し叔やたらんけ沖勢の朝鮮國へ渡海し
 日本入ることと推しな依けと地朝鮮の都とをり元三ふま



孫玄清
元良哈
我死
の
園

真言宗
卷五



徳山源州より
富士山と
見侍
図

の恥は皆山の岸は多集れぬ跡に朝鮮人ひしく陣を
 つくは槍刀の光霜のつく輝流の風は抄靡く霞は似たり日を
 の諸おいらんとし冷方方く只岸よりを矢と村とせ我ひとし
 とのこそ後ら十日計りてさる多長沈と漆と素と士卒
 命じて帷幕旗旗とえ納め陣とこがら小を具と焼捨退き道
 ろく形をうせ朝鮮の軍中より是とんく日本人にと後るべき候
 方く退座し引をせや退りて討えとやと申碇人とも大おむ勢を
 引て是先は恥とせんとし令令え名大又制し味方只悠雅の地
 と堅く守り敵の旁と好不利あり候り退てりやまらる仕出
 そとこまへくよむまじも申碇人又よせ入るは槍徴名とら大お
 り候は兵をとり退討人と教渡の大恥といふくと飛鳥小尉は

艦と解さ向ふの岸へ槽とせり小西が軍兵とんくえ物や
 けに懸と海し槍と捨さんぐと迎多る小を朝鮮人勝と多あり候
 を候し周を焼つて進しり小西が勢通てエとらふれが山間の難
 不又敵と引いとお國の名流と叫んは石を左右の山は休むと
 ろ惣義智小西も度々本戸他右境門等一日は敵り又敵の備の心
 中へ敵百挺の鉄炮と筒先りりお居せは又又仇矢のつらひこそ
 義と恥しと例と記以多長し軍勢とりり久しと一入字は又又
 とは朝鮮の軍兵是よりなりと當と立大お申碇名と鉄丸は
 て命と落せは抄兵何りたまるべき粉のどく討らされけのや
 逃出されど恥は多るなり候り候り候り小西が軍兵槍襖と他
 て退討とせりきね候り候りの中へ飛鳥小尉のさるがわを枯の本の

真蹟記六篇卷五

七十一

築の風は乱れきり教がどし（令令元征徳島人）の両大おの川の行を
 遙くけ勢と申見肝と為（元とこひ面のまのどく人心地）
 きおろし傍に（朴忠侃）とる者この叶に（とるま）小馬を敵に
 逃出せば忽ち惣軍の亂し逃れと鳴り（平壤）にてまう多
 を令令元（名）應（名）人（名）引軍を引まら心方より逃れ小西
 外長惣義智の款の船と奪ひ軍勢と小西に後へ平壤に（平壤地）
 と進出にまてに破竹の勢ひなり

小西外長お大明

さるわぐに小西外長軍勢と率て大日（名）の東の海に退け
 を日本の諸お大を黒多の川退くは續き（つ）討朝鮮の大
 李（名）胎（名）軍（名）懐（名）城（名）よあたらが味方ありの軍を利とすひ日本勢とを

國境と押考うるとは大に恐る大明へ援兵と乞ひ捕の園を引
 がおし（さ）れども又大明に種々後漢あり朝鮮先むりともく
 王城とも失ふるや先却て日本人を我國へ引かすの計は誰に
 やなと區々の冷後日と過（と）援けの兵も到りたかくてまは
 敵永くころ人難（と）とく大王李胎城とゆく小の方へ逃れんとは抑
 成龍（名）とて居下智意海と若う仕が大王の城と出給り（と）甚よは
 うと教度法（と）とてとれと城中の軍皆日本勢と恐るは
 のと王と進めて海交度の外更に地よりありたり安又一説は日本
 先鋒の大お小西外長と加友清心と其間更に曠くは後て
 犯る謂とあるが若れも記せし水の政所は加友清心が後より逃れ人
 後若い小西外長は荷擔し給ひ朝鮮海の後より肉く別の後を



小西
中長
申
軍
氏
圖

真蹟記六篇卷五

七四



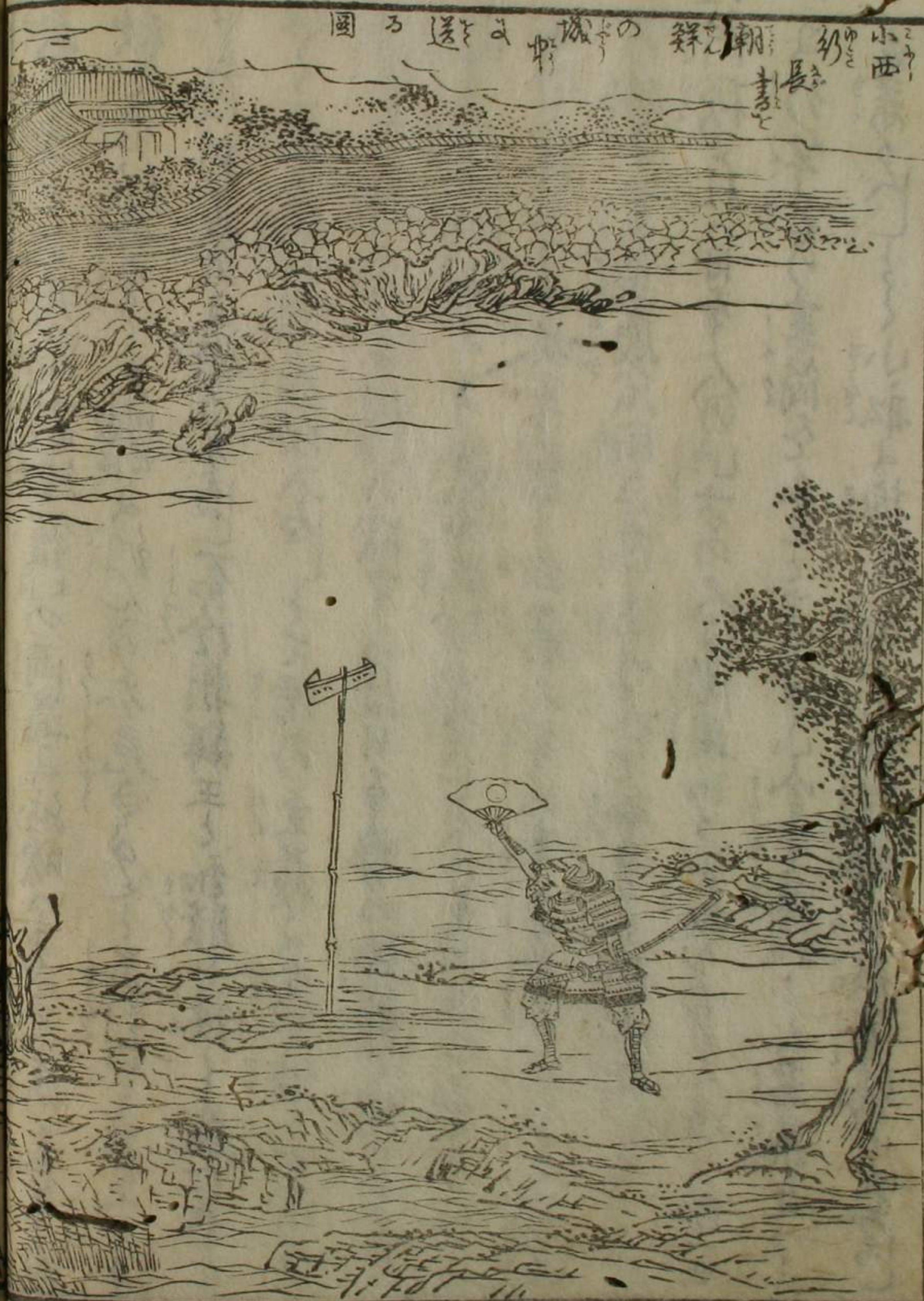
真蹟記六篇卷五

七五

是の如く後君よりいけ度り我功加... 河を西目を失ふるが衆に... 乃長力へ告げ終るに... 乃武功勇名... 彼國の人民と... 勝利を先ひし其根國の中より... 次は... 以ともも雨をよと加... 打破り鴨緑江明と朝鮮の... を破りさんと... 計議

又二史世に慶尙の... 欽と悉に... 是は乃長と... 以く道と用き... 一送んと計り... 練光亭... 小西陣より小具足... 乃砂とよ... 何様これい日本人の... 又乃竿との書簡を... 五来るべしとく小船を...

真蹟言六篇卷五

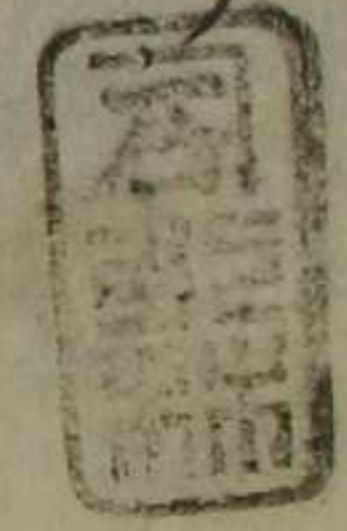


西
 小
 仍
 潮
 録
 の
 城
 中
 又
 送
 乃
 國

貞
 顯
 記
 六
 冊
 卷
 五

十五

又恥^のを^りて^城中^の海^の柳^成龍^を執^りて^柳成^龍を^立て^て
披^き足^しる^西の^長朝^鮮王^と和^議を^すん^だ乃^ち書^牒を^りて^是を^依
て^朝鮮^の城^中に^設議^區を^しり^て又^も交^せて^先人^を日^本の^陣中^に
の^長を^對面^して^渠が^實情^と探^り知^り而^後に^率と^定む^じし^と
其^日乃^ち設^議を^止む^り



繪字右圖記六篇卷之八終

